

論文の内容の要旨

論文題目 語りの断層——ドイツ連邦共和国におけるポーランド人作家の現代文学
Dislocated Narratives——Contemporary Polish Literature in the Federal Republic of Germany

氏名 井 上 暁 子

本研究は、国境線が幾度も引き直され、民族・文化・言語の混成が進んだポーランド北部／西部国境地帯が、社会主義末期ポーランドからドイツ連邦共和国へ移住した5人のポーランド人作家の文学において、いかに表象されうるかを論じている。本研究が対象とする作家は、1950年半ばから60年代、旧ドイツ領にあたるポーランド北部／西部国境地帯に生まれ、ポーランド語を母語とする。彼らは、ドイツ／ポーランド間の移動が容易になった体制転換後もドイツに留まり、ドル。1980年代西ドイツへ移住しドイツ語ないしポーランド語で創作する。従来、彼らの文学には、「亡命というトポスの脱神話化」「ポストモダニズム」「スラヴ系移民作家の戦略」といった特徴が指摘されてきたが、その内容の大部分は手法や美的要素に限定されており、社会学的歴史学的背景は考慮の外におかれてきた。

しかし、本研究では、ドイツ・ポーランドにまたがる地域の固有性、1981年の戒厳令から体制転換を経て2004年に至るまでという時代性、ポーランド語／ドイツ語圏の文芸批評という三つの観点から、彼らの文学を取り巻く歴史的社会的文化的条件を明らかにするとともに、体制転換に伴う社会及び創作環境の変化が、彼らの文学の題材、テーマ、手法に与えた影響を論じている。また、彼らの文学における「一人称体の語り」（「わたし語り」）に注目し、彼らが既存のディスコースを戦略的に脱臼させ、異化していることを明らかにしている。

「語りの断層」という本研究のタイトルには二つの意味がある。ひとつは、彼らが語りの行為主体であり、その独特な表現活動によって、支配的なディスコースにずれ（断層）を生じさせていること、もうひとつは、支配的ディスコースの「ずらし」「屈折」「異化」をぬきには描くことのできない地域像があることを表している。

周知のように、ポーランド北部／西部国境地帯は、第二次世界大戦前まではドイツ東部領に属し、戦争末期から戦後にかけて、ドイツ系住民の逃亡と組織的追放が起こった地域である。ドイツ系住民追放後には、旧ポーランド東部領からポーランド系住民が強制的に移住させられた。社会主義体制下においては、辺境地域にかつて存在した多民族性・多文化性・多言語性は抑圧され、単一民族・文化・言語の神話が構築されたが、1980年代末になると、そうしたイデオロギーを脱構築する試みが始まった。

本研究で取り上げる5人の作家は、旧ポーランド東部領からの強制移住者の次世代にあたり、その生は、民族・文化・言語の混成化が進んだこの地域の歴史に深く根差している。彼らは、成長過程で、自分たちの故郷にドイツやユダヤの文化の痕跡を発見するという共通体験をもっている。ちなみに、彼らと同世代の作家の中には、かつて複数の民族・文化・言語が存在した自分たちの故郷を、歴史的事件の記憶から私的な物語まで、様々な言説によって編まれた多層的なテキスト（パランプセスト）として表象するという手法を編み出した者もあり、それらの作家の作品は、1990年代のポーランド語文学としてポーランド国内外で高く評価されている。

体制転換後、移動や文化が一気にグローバル化する中、本研究で取り上げる人々の存在形態や創作は輪郭を与えることが難しくなった。しかし、本研究では、先に挙げた三つの観点（ドイツ・ポーランドにまたがる地域の固有性、1981年の戒厳令から体制転換を経て2004年に至るまでという時代性、ポーランド語／ドイツ語圏の文芸批評）を手がかりに、彼らの存在形態と創作の両方を、ドイツ／ポーランドにまたがる地域の文化という文脈で論じている。

本研究は、二つの部から構成されている。第1部では、彼らの創作を取り巻く歴史的社会的条件を概観している。第1章では、ドイツのポーランド文化の成立と発展の経緯を振り返り、ドイツが、ポーランドの亡命文学研究においてマージナルに扱われてきた理由を考察する。続いて第2章では、社会主義崩壊後ドイツ在住の若手ポーランド人作家の手により発行されたポーランド語文芸誌 *Bundesstraße 1* を手がかりに、体制転換後、彼らが「在外作家」ではなく、「ドイツ語作家」「ポーランド語作家」といったアイデンティティを確立していく経緯を明らかにする。さらに第3章では、2000年代初頭ベルリンに設立された「ポーランド人失敗者クラブ」を例に、在外ポーランド人芸術家による新しい文化活動の特徴を論じる。

第2部では、ポーランド北部／西部国境地帯に生まれた5人の作家の「わたし語り」が、国家や地域を神話的なディスカールの集合体として逆照射しつつ、それをずらしていることを明らかにする。まず第1章では、彼らの「わたし語り」が、1980年代に書かれた移民の群像小説においてももうすでに、移民の単線的な身の上話にとどまらない、豊かなパフォーマンス性に満ちていたことを示す。

第2章から第5章では、彼らが「移民」という狭義の自画像と距離をとった1990年代以降の作品を取り上げ、4人の作家の「一人称体の語り」に注目する。彼らは、「放浪者」（ルドニツキ）、「原郷喪失者」（ニュヴジェンダ）、「旅行者」（ゲルケ）、「地球外生物」（ムッシェル）のまなざしによって、国家、地域、歴史、民族的文化的アイデンティティをめぐる様々なディスカールの裏をかき、それらを自己定義や表現に利用したり、脱臼させたりしている。ここでは、そうした語りによって、彼らが場所や地域の像を自らの手で結び直そうとしていることを明らかにする。